

令和 7 年度第 2 回

奥州市総合教育会議
会議録

令和 7 年 12 月 25 日 開催

奥 州 市

I 開会、閉会等に関する事項

開催日時 開会 令和7年12月25日（木）午後3時30分

閉会 令和7年12月25日（木）午後5時01分

開催場所 奥州市役所本庁7階 委員会室

2 出席者の職及び氏名

倉 成 淳 市長

高 橋 勝 教育長

佐々木 哲 也 委員（教育長職務代理者）

松 本 崇 委員

菊 地 幸 委員

猪 股 登喜子 委員

3 説明のため出席した職員

（協働まちづくり部）

千葉達也協働まちづくり部長、菊池淳生涯学習スポーツ課長

（教育委員会事務局）

高橋広和教育部長、松戸昭彦教育総務課長、千田有美学校教育課長、菅野明史
学校教育課主幹、小野寺正行歴史遺産課長

事務職員出席者：丸山深幸教育総務課課長補佐

4 議題

奥州宇宙遊學館の今後のあり方について

5 会議の概要

開会、市長・教育長挨拶、議題の協議、閉会

第1 開会

高橋教育部長が開会を宣言

以降、高橋教育部長が進行、第4及び第5についてはテーマに従い倉成市長
が座長となり進行

第2 市長挨拶

倉成市長より、委員への日頃の教育行政への協力に対する謝意が述べられ、
総合教育会議は、市長と教育委員会が本市教育の目指す姿について意見交換し、
課題の共有と調整を行う重要な場であるとした。

本日の議題である「奥州宇宙遊學館の今後のあり方について」、市内には宇宙遊學館や牛の博物館など、全国的にも希少で歴史的価値の高い施設が存在しており、それらをどのように活用していくかが重要な課題であると述べた。

AIやインターネットによる情報取得が容易な時代だからこそ、実際に訪れて体験する価値のある施設の意義は大きいとの認識を示した。

宇宙遊学館は、市が国立天文台から旧緯度観測所本館の譲渡を受けて開館、17年が経過し、現在は生涯学習施設として位置付けられているが、隣接する国立天文台水沢VLBI観測所とともに、市民、特に子どもたちが宇宙や科学に触れる拠点として、今後どのように発展させるかが本日のテーマであると述べた。

最後に、委員から幅広い意見をいただき、活発な議論を行いたいとして協力を求めた。

第3 教育長挨拶

高橋教育長より、市長の教育行政への理解と協力に対する謝意が述べられ、教育委員会としては、市長と十分な意思疎通を図りながら、教育の課題や将来像を共有し、民意を反映した教育行政を推進する上で、総合教育会議が重要な役割を果たしているとの認識が示された。

宇宙遊学館は平成20年の開館以来、自然科学を学ぶ場として活用されており、来年度から本格実施される「ふるさと学習」では、奥州市の天文学や当該施設の紹介、天文学と関わりの深い高野長英、旧緯度観測所と宮沢賢治との関係についても取り上げられており、今後、子どもたちが施設を訪れる機会の増加が見込まれると述べた。

自然科学への探究心や豊かな想像力を育む場として、宇宙遊学館をこれまで以上に有意義に活用していきたいとして、委員からの意見を今後の方向性検討に生かしたいと述べた。

第4 協議

テーマ「奥州宇宙遊学館の今後のあり方について」

○千葉協働まちづくり部長がテーマ設定の経緯説明

概要：宇宙遊学館は、平成20年4月に開設されて以来、NPO法人イーハトーブ宇宙実践センター（以下NPO）が指定管理者として運営してきた。長年の活動により、市外・県外からの来館者も多く、科学館的施設としての認知が高まっている。近年は、幼稚園・小中学校に加え、高校への理科系出前授業など教育活動も拡大しており、NPOからは、今後さらに奥州市の子どもたちのための教育機関的機能を高めたいとの要望が出されている。一方で、科学館化に伴う財政負担や専門人材（学芸員等）の確保といった課題があることから、今後の具体的な方向性について検討を進めるにあたり、本会議で委員の意見を伺う目的で本テーマを設定した。

○菊池生涯学習スポーツ課長が資料に基づき内容説明

概要：施設は旧国立天文台水沢VLBI観測所本館を活用した木造2階建てで、来館者数は令和元年度に約2万6千人とピークを迎えた後、コロナ禍で減少したが、現在は約1万6千人まで回復。開設当初から生涯学習施設として運営され、指定管理者であるNPOが、自然科学分野を中心とした学習活動や市民交流を担ってきた。一方、NPOからは、科学館機能の強化、専門職配置、人件費確保に関する要望が出されており、人材の高齢化や定着の難しさが課題。今後については、出前授業の拡充、体験型プログラム、地球環境や災害をテーマとした学習、天文学の基礎的内容を分か

りやすく伝える取組み等を考えている。これらを踏まえ、宇宙遊学館を今後も生涯学習施設として継続するのか、科学館として発展させるのか等々について、委員の意見を参考に今後の在り方を検討していくことが今回の趣旨である。

【協議】

○各委員からの意見（要旨）

佐々木委員：奥州宇宙遊学館を訪れた印象として、展示や情報量が多く、施設として最も伝えたい目的や核心が分かりにくい点を指摘した。特に「Z項（緯度観測）」など重要なテーマについても、来館者が十分に理解できる構成になっておらず、施設の位置づけが曖昧になっていると感じたと述べた。

本来は、緯度観測所時代の意義や木村先生の業績を中心とした記念館的役割を大切にし、市民や国民に分かりやすく伝えることが重要であるとした。一方で、NPOによる子ども向け教育活動の広がりは評価しつつも、国立天文台の現在の研究内容や成果との結びつきが弱く、より明確な発信が必要であると指摘した。

今後の在り方としては、財政的制約を踏まえ、記念館機能を軸としながら、デジタル教材の活用、学校や地域の部活動支援、文化活動の受け皿としての活用など、低コストでの教育的展開を提案した。また、生涯学習の観点から、国立天文台の研究者による講座を市民大学的に継続実施することも一案であると述べた。

菊地委員：宇宙遊学館について、立地条件の良さ、歴史的価値のある建物、運営法人（NPO）の実績、国立天文台という奥州市ならではの強みを挙げ、夢と可能性に満ちた施設であると高く評価した。17年間にわたる丁寧な活動の積み重ねと、今後の発展への姿勢に期待を示した。

一方で、科学館化に伴う人件費や財政負担については、市や市民にとってどのような効果があり、その費用が妥当なのかを明確にする必要があると指摘した。また、今後予定されている新たなプログラムが、専門人材の配置を前提としなければ成立しない内容なのかについて疑問を呈した。

教育的効果としては、宇宙や自然を通じて子どもたちが広い視野を持ち、科学的思考力や探究心を育む意義を強調し、専門性に限らず汎用的な学びの力を育てる価値があると述べた。さらに、宮沢賢治や高野長英、観光分野など多様な分野との連携の可能性や、他団体と協働できる運営法人（NPO）の力にも期待を寄せた。加えて、情報発信の強化やSNS活用、認定NPO法人化による寄付獲得の可能性など、運営基盤を安定させるための提案を行った。

猪股委員：幼稚園勤務時代に子どもたちを宇宙遊学館へ連れて行った経験から、難しい内容だけでなく、子どもたちの興味や遊びを広げる力のある施設であると評価した。来館体験をきっかけに、園に戻ってからも重力や宇宙を題材にした遊びや学びが広がった事例を紹介した。

また、最近あらためて来館した印象としては、乙項などの説明が分かりやすくなり、施設全体が多様な展示を備えた「宝箱」のような場所であると感じた一方、内容が豊富なため一度では見切れず、テーマを絞って何度も訪れる施設であるとも述べた。

自然科学や災害、地質など幅広い展示については、展示方法を工夫することで、さらに関心を深められる可能性があると指摘した。また、専門性の高い人材確保については、市の財政状況次第では予算確保の余地もあるのではないかとの見解を示し、認定NPO法人化などの支援策にも言及した。

松本委員：親子で一緒に宇宙遊学館を利用しててきた経験から、体験型展示やサンデースクールは評価する一方、展示内容の更新不足や、ブラックホールなど難解なテーマが「すごいが分かりにくい」と感じられる点を課題として挙げた。学芸員による解説ツアーなど、専門家が直接説明する機会を増やすことで理解が深まるのではないかと指摘した。

また、施設の目的や展示意図が来館者に十分伝わっていない点を課題として挙げた。教育的観点では、地学や宇宙分野は授業だけでは想像しにくく、専門家による説明や映像、体験を通じて理解が深まることで、算数や国語など他教科や非認知能力にも良い影響を与える可能性があると述べた。

人材確保の難しさを踏まえ、理科人材不足の現状を指摘し、地域おこし協力隊など新たな仕組みを活用して、自然科学・地学分野に関心のある人材を呼び込む可能性を提案した。

○意見交換（要旨）

宇宙遊学館の将来像と役割について、教育・観光・人材・運営体制の観点から幅広い議論が行われた。

倉成市長は、牛の博物館で活躍する女性職員の事例を挙げ、専門知識を持ちながらも、難しい内容を分かりやすく、興味を引く形で伝えられる人材の重要性を強調した。宇宙遊学館においても、同様に「伝え方」を担う人材が不可欠であり、その価値を行政としてどう支えるかが大きなテーマであると述べた。

委員から共通して指摘されたのは、宇宙遊学館には緯度観測所、天文学、星座のロマン、地学・地震学など多様な要素が詰め込まれている一方で、全体のコンセプトが十分に整理・表現されておらず、「ごった煮」状態に見えるという点であった。限られたスペースの中で工夫を重ねている努力は認められるものの、誰に何を伝えたい施設なのかが来館者に分かりにくいという課題が共有された。

佐々木委員は、現在の建物規模を踏まえると、記念館的に観測所の業績を残し、国立天文台の最新研究紹介を行う程度が現実的であり、それ以上詰め込むと無理が生じると指摘した。また、子ども向け教育については、今後はデジタルミュージアムの活用も一つの方向性であり、世界中からアクセスできるデジタル教材の整備が考えられるものの、費用や人材確保の面で難しさ

があると述べた。展示としては、惑星写真や模型、ブラックホールなど、子どもが直感的に興味を持てる初步的内容にとどめるのが現実的だという見解を示した。

これを受けて倉成市長は、国立天文台の研究成果は同天文台自身のネットワークで発信してもらい、宇宙遊学館は市民と天文台をつなぐ「窓口」やPRの役割を担う方向性もあり得ると述べた。ブラックホール発見の地であることは象徴的に残しつつ、それ以外は夢や興味を広げる役割に重点を置くことで、研究機関との役割分担が可能ではないかと問題提起した。

菊地委員は、宇宙遊学館を「可能性のある施設」と評価し、宇宙と天文学を中心に、子どもたちが視野を広げ、今の社会だけが全てではないことを感じられる場としての意義を強調した。また、疑問を持ち、仮説を立てて検証するという科学的思考を学ぶ入り口としての役割にも価値があると述べた。

倉成市長はこれを受け、観光的なマーケティングで人を呼び込み、その上で学びを提供する形が有効ではないかと整理した。

猪股委員は、子どもにとっては魅力的な要素がある一方、観光客の視点では説明が不足しており、どこをどう見ればよいのか分かりにくくないと指摘した。音声ガイドやボタン操作による解説など、一般来館者でも理解しやすい仕組みが必要だと述べ、倉成市長も短時間滞在者向けと、長時間・専門志向向けでは異なるコンテンツ設計が必要だと認識を示した。

松本委員は、「宝箱」とも言えるほど要素が多い反面、整理されていない印象があると述べ、30分・1時間・2時間といった滞在時間別の見学モデルや、最低限見るべき展示の提示が必要だと提案した。また、子ども連れでは館内で子どもが見失われやすく、親子で動きにくい構造であることを指摘し、子ども向け施設なのか大人向け施設なのか、軸を明確にする必要があると述べた。

倉成市長は、初心者向けの導入的な展示を別の場所（市街地など）に設け、そこから宇宙遊学館へ誘導する分散型の活用も観光面では有効ではないかと提案した。

松本委員も、学校教育と連動し、授業で基礎を学んだ上で遊学館を訪れる流れができれば、より深い学びにつながると応じた。

佐々木委員は、NPOによる努力を評価しつつ、市としてどの程度の支援が可能なのかを明確にする必要性を指摘した。また、過去に天文写真提供などで貢献した市民の例を挙げ、かつて天文に親しんだ市民を巻き込んだ運営ができれば、施設の魅力はさらに高まると述べた。

千葉部長からは、指定管理料の現状（年間約2,000万円、来年度からは約2,600万円に増額予定）と、盛岡市の子ども科学館との規模差が説明された。専門的な学芸員配置には相応の人員費が必要であり、後継者不足が深刻な課題であること、現在は職員の育成を進めながら運営している状況が共有された。また、展示内容が研究者主導で増えすぎて分かりにくくなっている点について、今後NPOと協議していく考えが示された。

議論の終盤では、テーマパーク的要素と博物館的要素をどう整理・分担するかが今後の大きな論点として示された。興味を持ってもらう機能と、興味

を深める機能の両立には、人材・予算・展示構成の再整理が不可欠であるとの認識が共有された。

教育長からは、宇宙に特化した核となる展示と、企画展的に入れ替えるスペースを分ける構成や、音声解説など分かりやすさを高める工夫、子ども向けの継続的な学びの場（ファンクラブ的仕組み）の提案がなされた。

最終的に倉成市長は、今回の意見を指定管理者と丁寧に詰め、令和8年度は議論と機運醸成を進め、令和9年度以降に具体的な施策につなげていく考え方を示し、多くの示唆を今後の検討に生かすことを確認した。

第5 その他

佐々木委員から、胆沢地区を中心とした熊の出没について、児童生徒の通学や地域活動時の安全確保を懸念する意見が出された。市全体として可能な範囲での熊対策を検討できないかとの提起があった。

これに対し倉成市長から、国の熊対策パッケージを活用し、駆除強化や通学路・スクールバス経路の見直しなど、具体的な対策を検討しており、内容については今後市民へ周知する予定であるとの説明があった。また、熊の影響が市民生活や観光事業にも及んでいる現状が報告された。

続いて千葉部長から、指定管理料の金額については、正式には1月議会での議決事項であるため、本会議内での取り扱いに留めるよう補足があった。

第6 閉会

高橋教育部長が閉会を宣言